

「赤松の荒神祭」 県指定文化財に！

大山町赤松の「赤松の荒神祭」が、平成25年9月20日付けで鳥取県指定無形民俗文化財に指定されました。

赤松の荒神祭は、承応3年(1654)に大干ばつにあつた赤松村で、氏神様から閏年2月2日に五穀豊穡と村の繁栄を祈って大蛇を奉納するようお告げがあり、藁で大蛇をつくって奉納したことに始まると伝えられており、今まで約360年にわたって伝承さ



▲赤松の荒神祭

れている神事です。

現在は、4年に一度、閏年3月第1日曜日に、藁でつくった大蛇を担いで集落内を巡行し、荒神さんに奉納して

います。38mあつた大蛇も担ぎ手の減少や制作場の関係で現在は25mになりましたが、県内最大を誇っています。

赤松の荒神祭は、出雲から伯耆の地域で特に盛んな荒神祭に共通の特徴をよく表す一方、巨大な藁大蛇と大量の幣束(御幣)を供えること、四年の間に婿入りした男性が祈願祭に参列し、大蛇巡行では重要なシンボルを担ぐという入り婿の入村儀礼が見られるなど、独自の要素を備える特徴があり、無形民俗文化財として貴重と評価されました。

大山僧坊跡(E-33区)発掘調査 戦国時代の僧坊跡？を発見

平成25年6月から10月末の間、大山町大山に広がる大山僧坊跡の一角で、民間開発に係る事前確認のため、発掘調査を実施しました。

調査地はE33区と呼んでいる約2500㎡の平坦地の一部で、西側は江戸時代後期に移転建立された、大山寺南光院谷の重要な施設である「釈迦堂」の跡であり、礎石や建物基礎、多数の陶磁器類を検

出しました。その東側では石列3か所のほか、銅製孔雀文馨や貿易陶磁器、国産陶器などが多数出土しました。

出土遺物などから、16世紀から17世前葉の戦国時代から江戸時代初め頃に、ここに堂舎や僧坊などの施設が営まれていたことを確認しました。

それらはその後他所に移されたか、あるいは廃止され、しばらくの間、土地が利用されない時期があつたようですが、江戸時代後期になって再び造成されて、釈迦堂が建立されたことがわかりました。

発掘調査で、孔雀文馨が出土したのは県内では初めてで、伯耆大山寺の歴史を考えると、大変貴重なものです。



▲検出した戦国時代頃の石列

▶現地説明会



▲出土した銅製孔雀文馨